



代表執行役社長
稲垣 裕一

5期連続で最高売上高を更新。 グループ丸となって、 変化に即応できる組織への変革を。

継続的な物価上昇や米国の貿易政策の動向、中東情勢の緊迫化など、世界経済は依然として先行き不透明な状況が続いています。当社グループを取りまく事業環境においても、xEV市場の需要低迷や、当社採用品モデルのピークアウトによる影響など、予断を許さない状況が続いています。このような状況のもと、私たち指月電機グループは、産業機器用コンデンサ、xEV用コンデンサ、電力機器システムを中心とした重点事業の売上拡大に努めるとともに、継続して取り組んできた「生産性の改善」、市場の動向を踏

変化から進化を。 改善から、より善い明日を。

2019-2028年度 長期経営ビジョン

10年後の指月グループのあるべき姿

挑戦する社風へと変革し、
品質第一のモノづくりと、
未来を見据えた新技術・新商品の開発、
グローバルな事業展開の推進により、
社員の夢を実現し
社会に貢献する企業グループになる

まえた「資源の再配分」、そして、グループ丸となった「連携強化」に取り組んでまいりました。

結果として、中期経営計画第Ⅲ期の初年度にあたる2025年度の連結売上高は27,995百万円(前年度比2.4%増)となり、5期連続で過去最高値を更新。営業利益は前年度比27.1%増となる2,529百万円、当期純利益は前年度比66.6%増となる1,990百万円となり、2014年以来11年ぶりに過去最高を更新する運びとなりました。

特に、電力機器システムにおいては、AIやビッグデータ、IoT、クラウドサービスの拡大を背景としてデータセンターなどへの設備投資が増加。その旺盛な需要に応えるべく、進相コンデンサや直列リアクトルなどの力率改善用機器が大きく伸長しました。収益性の高い電力機器がグループ全体の収益力を押し上げるかたちとなり、ROE(自己資本当期純利益率)においても、2025年度実績8.2%(前年度比3.0%増)と、2028年度の目標を先行して達成。まだ道半ばではありますが、第Ⅲ期の初年度として、確かな手応えにつながる一年となりました。

一方で、xEV市場の減速によって生じた余剰生産力については、産業機器分野への振り向けや生産ラインの共有化、生産体制の見直しを図ることで、市場変化への柔軟な対応を進めています。

徹底した改善を通じて 従業員一人ひとりに芽生えた、 自ら考え、動く力。

市場の変化に即応できる、適応力のある組織への変革。それを象徴する取り組みのひとつが、グループを挙げて推進してきた「生産性改善」への挑戦です。

例えば九州指月では、旺盛な需要に対して生産能力が

追いつかず、生産ラインの見直しが喫緊の課題となっていました。そこで秋田指月や岡山指月、西宮本社の若手リーダーたちが九州へ集まり、およそ3カ月にわたって集中的な改善活動を展開。設備や工程、治工具の配置、作業者の動きと動線などをゼロベースから見直し、約200項目にのぼる「改善」を徹底的に推進しました。その結果、ある製品において一日あたりの生産台数が160%を超える改善を実現するなど、当初期待された目標を上回る生産能力の改善が見られ、収益増にも大きく貢献しています。

重要なのは、単に設備を更新したことではありません。本社や工場、開発・製造・販売といった立場を越えて知恵を出し合い、「どうすればもっと良くなるのか」を一人ひとりが主体的に考え、改善へとつなげる文化が、グループ全体に根つき始めていることに、次へとつながる手応えを感じています。

現在は、九州指月における改善活動で培われた知見と経験を、秋田指月をはじめとした他拠点へ水平展開する新たな挑戦も動き出しています。市場環境が大きく変化する時代だからこそ、グループ全体で知恵を出し合いながら、自ら考え、行動し、改善を積み重ねていける組織づくりを、さらに推進していく所存です。



xEVと産業機器。 それぞれに磨いてきた技と知を融合させ、 新たな価値を創出する。

グループ一丸となった変革は、生産性の改善だけでなく、新たな製品の開発においても実を結び始めています。

現在のコンデンサ・モジュール事業部門は、これまでxEV分野と産業機器分野に分かれていた組織を統合するカタチで誕生しました。自動車という高度なものづくりを支えながらxEV分野で培ってきた高品質・高精度な技術。産業機器分野でお客様の多様なご要望に寄り添いながら培ってきた柔軟なカスタム対応力。その両面を掛け合わせることで、新たな価値創出に向けた挑戦が動き出しています。

例えば、現在進行している新たな開発テーマでは、こ

れまで別々に磨かれてきた技術やノウハウを融合させ、新しいコンセプトをそなえた新製品の開発を推進しています。これは単なる新製品開発ではなく、xEV市場の変化によって生じた余剰生産力の有効活用や、生産拠点間の連携強化まで見据えた取り組みでもあります。

また、既に顕在化しているお客さまのご要望をかたちにするだけでなく、自分たちが主体となってお客さまの想像を超えるものづくりに挑み、それによってこれまで見えなかった潜在的な需要を掘り起こすという面でも、現在推進している開発テーマは、私たち指月電機グループが新たな一歩を切り拓くためのチャレンジだと考えています。

私たちはこれからも長期経営ビジョンに掲げた「挑戦する社風への変革」に向けて、さまざまな面から挑戦を重ねていく所存です。株主の皆さまにおかれましても、ご支援とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

開発・製造・販売 あらゆる面で進む「知の融合」



変革への、変わらぬ覚悟

挑戦する社風への変革、 この一点に懸けた7年間

取締役会会長
足達 信章

2019年に代表執行役社長へ就任して以来、コロナ禍、原材料の価格高騰や供給不安、円安の急進など、私たちを取り巻く事業環境は絶えず変化してきました。変化が常態化する時代にあって、浮き彫りになったのは、変わるべき自分たち自身の姿でした。

私たちは長期経営ビジョンの中で「挑戦する社風への変革」掲げ、結果だけを求めるのではなく、自ら考え、行動し、改善を積み重ねるプロセスを大切にしながら、部門や拠点を越えて知恵を持ち寄る組織づくりを進めてきました。まだ道半ばではあるものの、この7年間で、従来の枠組みを超えた行動を自ら発案し、周囲の共感を得ながら挑戦に取り組む人材が増えてきたことを心強く感じています。

そして今、稲垣新社長や次世代を担うリーダーたちのもと、その変化を組織全体へと広げていく段階へ進もうとしています。株主の皆さまには、これからも変わらぬご支援とご期待を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

シツキの原点を改めて見つめ、 挑戦の原動力へ

代表執行役社長
稲垣 裕一

この度、代表執行役社長に就任いたしました稲垣裕一と申します。私は1990年の入社以来、生産技術や電力システムの技術・開発に携わり、アクティブフィルタの技術を確立させるべく尽力。その後は技術部門の部門長、グループ工場の代表取締役などを務め、シツキのものづくりと事業運営に携わってまいりました。

社長就任にあたり、私自身はゼロからの出発の覚悟ですが、決してゼロから始まるわけではありません。今、改めて感じるのは、創業以来受け継がれてきた「お客さま第一主義」と「人間性尊重」という理念の重みです。足達会長のもとで進めてきた「挑戦する社風への変革」は、シツキの理念と深く結びつくものであり、これから一層、一人ひとりが力を発揮しながら新たな価値を創出できる、一体感のある組織づくりを進めていく所存です。

株主の皆さまのご期待に応えるべく、企業価値の向上に挑み続けてまいります。ご支援、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。